

氏名(本籍)	さだ ひろ ひで のり 定 廣 英 典 (岡山県)
学位の種類	博 士 (心理学)
学位記番号	博 甲 第 6243 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	日常生活における演技 - その実態と臨床的有用性に関する探索的研究 -
主 査	筑波大学教授 医学博士 小 川 俊 樹
副 査	筑波大学教授 博士(心理学) 庄 司 一 子
副 査	筑波大学講師 博士(学術) 望 月 聡
副 査	筑波大学准教授 博士(心理学) 湯 川 進太郎

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本研究では日常生活の演技を「自己変容感を伴う対人行動」と定義し、演技の分類、演技の促進・抑制要因は何であるか、演技と対人不安の3点を明らかにするための研究が行われた。

第1章では、日常生活の演技に関する理論的検討および関連領域の知見が概観された。第2章では、自由記述調査による探索的調査、第3章では日常生活の演技頻度を測定する日常生活演技尺度を作成し、続く第6章まで、演技の促進・抑制要因、対人不安との関連についての質問紙調査の結果が示された。第7章では発声練習が演技に与える影響についての実験結果が示された。第8章ではこれらの成果が総括され、日常生活の演技の臨床的、研究的意義が示された。

(対象と方法)

本論文では大学生を対象とした6つの実証的研究が行われた。第2章では演技の実施頻度、必要性、演技が行われる場所、演技行動、演技の動機、演技の効果について自由記述式質問紙で調査された。第3章では第2章の結果を元に作成した日常生活演技場面尺度、日常生活演技行動尺度、日常生活演技動機尺度の3つの尺度からなる日常生活演技尺度が作成され、この新たに作成された日常生活演技尺度と、第3章では、セルフ・モニタリング尺度、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度、対人不安感尺度、第4章では罪悪感喚起状況尺度、規範意識尺度、対人不安感尺度、第5章では他者意識尺度、改訂セルフ・モニタリング尺度日本語版、信頼感尺度、Fear of Negative Evaluation Scale 日本語版尺度との関連が検討された。第6章では演技意識尺度が作成され、日常生活演技尺度、5因子性格検査短縮版との関連が検討された。第7章では実験的検討が行われ、発声練習群と詩の朗読群の比較がなされた。

(結果)

演技は多くの者によって、必要と考えられ、行われていること、演技は主に相手との関係性などの社会的成果のために行われており、その内容は大きく目立つ演技、目立たない演技、自己や利益のための演技に分類できることが明らかになった(第2章)。日常生活演技尺度が作成され、目立つ演技、目立たない演技、

自己や利益のための演技に分類することが可能であることや、その信頼性、妥当性が確認された。また目立たない演技は、女性が多く行っている、拒否回避欲求との関連が強いという特徴が、目立つ演技は賞賛獲得欲求との関連が強いという特徴が見出された。高演技者は対人不安感と正の相関が見られたが、多くの演技において、その相関は拒否回避欲求との関連で説明できることが示された（第3章）。罪悪感特性、規範意識が共に演技頻度を上昇させており、演技は他者を配慮した結果として行われるものにとらえられている可能性が示された（第4章）。「他者の非言語的表出に対する感受性」や否定的評価懸念が演技頻度を上昇させることが示され、また他者に対する不信感が高い場合には「感受性」や「内的他者意識」が高いと演技頻度は上昇するが、低いと演技頻度は上昇しないこと、「内的他者意識」、「感受性」が低い場合、不信感が低いと演技頻度は上昇するが、不信感が高いと演技頻度は上昇しないことが示された（第5章）。5因子性格検査短縮版の下位尺度である「外向性」「愛着性」と、演技に対する必要性や利益になるという意識が演技頻度を上昇させていることが示された（第6章）。普段演技を行っている者は不安を示す生理的反応を感じにくいこと、面接における自己の印象の評価が低いことが示され、発声練習は部分的に不安の生理的指標を低減させ、他者評価による話のうまさの評価を上げることが示された（第7章）。

（考察）

目立たない演技は、人が社会化していく中で身につけなければならない諸特性と強い関連が見られ、社会生活に適応していく中で重要度が高い演技であり、女性が多く行っていた。目立つ演技もまた他者への配慮や、規範意識といった特性との関連がみられた。また賞賛獲得欲求との関連が見られ、他者からよく見られたいという欲求が「目立つ演技」の実行に強く関連していた。本研究の結果から、目立つ演技、目立たない演技は、積極的に活動し、親密な関係を広め維持していくために必要とされている演技といえる。これらの演技は否定的評価懸念との関連もみられたが、他者と良好な関係を築こうとする思いの強さのために懸念が高まっていると考えることができる。演技が規範や他者を気遣うために必要とされており、加えてその原因が関係性を形成、維持することへの関心の高さであるとするれば、演技の質を向上させることでその低減を図ることが期待される。

一方で「実利」を目指すような現実的な演技は、演技への必要性、利益の認識によって頻度が増加するという結果がみられたが、対人不安と正の関連もみられた。これは実利を得るための演技が、より高リスクであるためと考えられ、重圧のかかる場面で演じようとするのが、対人不安を高めてしまうと考えられた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究によって、これまで実証的な研究によっては明らかにされてこなかった「演技」の実態が明らかとなり、これを測定するための日常生活演技尺度（場面尺度、行動尺度、動機尺度）、また演技意識尺度を作成した上で関連する諸概念との関係が示されたことは学術研究上の意義があり、評価できる。また、演技の改善が日常生活における適応に良い影響を及ぼすこと、演技的介入が日常生活の演技を改善できる可能性が示され、臨床的な意義も有する点で評価できる。そのうえで、「演技」の定義ならびに類縁概念との異同の不明瞭さや、実験におけるデザインに不十分な点が残りの、今後のさらなる研究が望まれる。

平成24年1月31日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。